ＡＩＧプレゼンツ
２０２４ ＭＬＢ CUP
主な規則と留意点

２０２４年2月

Ⅰ　大会規則

２０２４年リトルリーグ公認規定競技規則、トーナメント規則及びガイドライン、本大会特別規則並びに公認野球規則を準用する。

Ⅱ　登録

1　チーム登録
　連盟が承認した連合チームの出場を認める。（構成リーグ数制限なし）

2　選手登録
　1）学年　小学４年・５年生の選手
　2）人数　２０以内
　　ただし、選手が満たない場合は小学３年生の登録を認める。（選手技量・安全面を十分に考慮して判断すること）

3　監督およびコーチ
　1）監督　　１名
　2）コーチ　２名まで
　3）監督、コーチは成人のものに限る。
　4）携帯電話等外部と連絡することができる機器類はベンチへ持ち込んではならない。

4　登録した監督、コーチ、選手のみベンチに入ることができる。

Ⅲ　服装

1　選手は全員統一した服装を着用し、ユニホームの胸にリーグ名の表示のあるものに限る。
　なお、白色のアンダーシャツは認められない。
　連合チームは統一することが望ましいが、自リーグのユニホームでもよい。ただし、背番号は「１」からの連番とする。

2　監督、コーチの上着は襟付きの白色、スラックス（ズボン）は下記のとおりとする。
　1）白、黒、紺、茶、灰、ベージュの各色系を可とする。
　2）華美な色は不可。
　3）全体が単一色であること。（別色のライン等があるものは不可）
　4）チノパンは可。
　5）ジーンズは不可。
　6）ショートパンツは可とする。
　　ショートパンツの色とショートパンツ着用時の靴下（ハイソックス、短いソックス両方可）の色は、上記「1）項」に準ずるとする。
　7）監督、コーチは同一の服装であること。
　8）リトルリーグの指導者として節度ある常識的な服装であること。
　9）靴、ベルトの色は別色でも可とする。

3　監督、コーチの帽子は選手と同じものまたは白で統一したものを着用する。

Ⅳ　用具

1　捕手は試合及び練習中も公認のヘルメット（耳カバー付）付きのマスク、スロートガード、プロテクター（ロングタイプまたはショートタイプも可）、及びカップを着用する。

2　非木製バットは、ＵＳＡＢａｔ規格に合致したものでなければならない。（規則1.10参照）

３　瑕疵、変形等があるバットの使用は不可。審判員がそれらを確認する。
４　バットリング、マスコットバット、鉄棒、メガホンのベンチ持ち込みを禁止する。
５　野球用手袋、リストバンドの使用を許可する。ただし、投手は使用出来ない。
６　サングラスの使用は指導者、選手が必要なときは大会本部または審判員が確認して許可する。
７　ヘルメットの顎ひもを着用することが望ましい。また、フェイスガード付き、Ｃフラップ付きヘルメットの使用を認める。
８　グラブのひもは必要以上に長いものは認めない。
９　投手のグラブについては、縁取り、しめひも、縫い糸を除くグラブ本体（捕球面、背面、網）は白色、灰色以外の１色でなければならない。
１０　出場選手には安全確保の為、胸部保護パッドを着用することが望ましい。

Ⅴ　試合の準備

１　ベンチは組み合わせ抽選の若い番号を一塁側とする。
２　攻守は主将により、試合当日決定する。
３　シートノックは後攻より７分間とするが、都合でカットする場合もある。
４　シートノック時に限り背番号なしのユニホームで３人まで自チームの補助係として認める。
５　試合前のブルペンでの投球練習を監督及びコーチが傍らで見ていても良い。

Ⅵ　試合の運営

１　試合は６回制とする。同点の場合はタイブレーク制を採用し、延長戦は行わない。タイブレークの方法は次のとおりとする。
　１）攻撃は無死二塁から始める。
　２）打者は６回終了時の継続打順としその回に一番後に打順が回ってくる選手が二塁走者となる。
　　例：５番打者がその回の先頭打者なら４番の打順の選手が二塁走者となる。ルール上適格な代走を走者として出場させせることもできる。
　３）投手は６回に登板していた投手が投球規定に従って引き続き投げる。
２　全試合、３回１５点差または４回以降１０点差によるコールドゲームを採用する。
３　振り逃げ規則は適用しない。
４　ベースコーチは次の条件を満たしていなければならない。
　１）自チームのユニホームを着た有資格の選手と監督、コーチが務めることができる。
　２）２人の大人のベースコーチが許される。ただし、ベンチに監督またはコーチが他に１人いる場合のみ、監督、コーチが務めることができる。
　３）大人のベースコーチもヘルメット着用が望ましい。その場合、できる限りチームと同じものとする。
　４）ベースコーチは自チームの打者、走者のみに指示することができる。
　５）ベースコーチは同一イニング中、ボックスの移動はできない。
　６）コーチスボックスから出て自チーム打者及び塁上の走者に指示した場合は、攻撃側のタイムの数に数える。
　７）相手に対しスポーツマンシップに反する言動があった場合、１回目はベンチに戻す。当該者はその試合中コーチスボックスに入れない。２回目は監督が直ちに退場となる。
５　ベンチ内の監督及びコーチはみだりにベンチを離れることはできない。
６　攻撃側がタイムをとり、選手に指示する回数は１イニングに１回である。なお、守備側のタイムのとき、攻撃側の監督及びコーチが選手に指示する場合は回数に数えない。ただし、守備側の指示より長い時間は認めない。
７　監督、コーチが、１イニングに同一投手のもとへ１度行くことができるが、２度目にはその選手は投手から退かなければならない。また１試合に同一投手のもとへ２度行くことができるが、３度目にはその選手は投手から退かなければならない。監督、コーチが投手に指示する場合は、マウンドで行うこと。このときに捕手および内野手が集合しても良い。監督、コーチ及び選手はスピーディーに行動すること。

８　試合中に内野手がマウンドに集まることは規制しない。
ただし、試合の流れや頻度に応じて審判員が認めない場合もある。
９　投手のウォームアップ時に、打者などが打席に近づき、タイミングを測る行為を禁止する。
１０　走者やベースコーチなどが捕手のサインを見て、打者にコースや球種を伝える行為を禁止する。
もし、このような疑いがあるとき、審判員はタイムをかけ、当該選手と攻撃側ベンチに注意を与え、止めさせる。
１１　ネット裏または観覧席から相手リーグの情報を伝える行為を禁止する。
１２　ベースコーチなどが、打者走者（走者）の触塁に合わせて「セーフ」のゼスチャーとコールをする行為を禁止する。
１３　臨時代走
１）打者及び走者が事故等で走者になれない場合、臨時代走を認める。
なお、臨時代走は投手と捕手を除く打順の遠い選手とする。
２）攻撃が終わっても前記の選手が速やかに出場できない場合は、選手交代となる。
３）頭部に投球及び送球を受けたときには、必ず臨時代走を出す。
４）２アウトの場合、捕手または投手が走者のときに臨時代走を認める。
１４　走者が帰塁する場合を除きヘッドスライディングをした場合は、アウトになる。
１５　反則投球が発生したときは走者を進塁させず、投球しない場合もボールを宣告して投球数に加算する。
１６　反則投球が打者に当たった場合、反則投球ではなく打者は一塁へ進塁することができる。
１７　試合開始、終了の挨拶のときに監督は選手と一緒に整列する。コーチはベンチ前に整列する。

Ⅶ　監督、コーチ、選手の退場

１　次の場合、大会本部及び審判員は監督、コーチ、選手を退場させる。
１）自軍のベンチ及び応援席の中から、相手リーグ及び審判員に対し暴力及び暴言を吐いた場合、監督及び当該者を退場させる。
２）審判員の判定及び指示に従わなかった場合、監督及び当該者を退場させる。
３）Ⅵの１０、１１で、同様の行為を再度審判員が見つけたときは
①　攻撃側監督と当該者はその試合から退場となる。
②　打者は安打、守備側失策等で塁へ出た場合は打撃を取り消し、打ち直しとする。
③　打者が打撃を行いアウトになった場合は、アウトを有効とする。
このときに走者が進塁した場合（犠打等）は打撃前の投手が投球当時の占有塁へ全ての走者を戻す。

Ⅷ　降雨、日没、時間制限等で試合続行不能となったとき

１　正式試合が成立する前に続行不能となった場合は、サスペンデッドゲーム（一時停止試合）とする。
この場合全ての記録は有効となる。
２　試合成立（４回完了、または４回表完了で後攻チームがリードしている）後に続行不能となった場合、勝ちが決められる場合は試合終了とする。
３　試合成立後に続行不能となったが、同点で勝ちが決められない場合は監督によるコイントスで決める。
４　試合成立後に続行不能となった場合、表裏を完全にプレーした最後のイニングで試合が終了したものとする。最後のイニングで同点の場合も監督によるコイントスで決める。

Ⅸ　特記事項

1　「全員出場義務の規則」は、採用しない。

2　投手の規則

1）降板した投手はその試合では投手に戻れない。

2）投手が１日に投球できるのは下記とする。

リトル年齢区分	最大投球数
11 歳選手	85 球
9-10 歳選手	75 球
8 歳選手	50 球

3）投手が打者と対戦中に投球制限に達した場合は、その打者が完了するか、または打席中に攻守交代となるまで続投できる。

4）投手はその投球数によって下記休息日（登板禁止日）を守らなければならない。

1 日の投球数	休息日
66 球以上	4 日
51～65 球	3 日
36～50 球	2 日
21～35 球	1 日
20 球以下	不要

休息日はいずれも最終打者と対峙した時点での１球目の投球数が基準となる。

注：いかなる状況下でも、投手は３日間連続して投球してはならない。

5）選手は１日に２試合以上の投球はできない。

6）投手が４１球以上の投球をした場合、その日は捕手を務めてはならない。

注：投手が打者に対している間に、投球数が４０球に到達した場合、投手は以下のいずれかに至まで投げ続けることができ、その日その後捕手としてプレーできる資格を有する。

a．その打者が出塁する

b．その打者がアウトになる

c．第３アウトが成立し、そのイニングが終了する

d．その打者が打席を完了する前にその投手が降板する

投手は次の打者へ投球する前に降板するか試合が終了すれば、その投手はその後捕手としてプレーすることができる。

7）試合で４イニング以上捕手を務めた選手は、その日は投手を務めてはならない。

注：４イニングはアウト数(12)ではなく、守備についたイニング数とする。

また、２試合行った場合は、合計４イニング以上もその日は投手を務めてはならない。

8）捕手を３イニング（以下も含む）務めた選手が投手に交代し、同日２１球以上投げた場合、その日は再度捕手に交代してはならない。

例外：投手が打者と対戦しているときに投球制限数の２０球に到達した場合、以下の条件で投手は投球を続け、その後捕手への交代が可能である。

a．その打者が出塁する

b．その打者がアウトになる

c．第３アウトが成立し、そのイニングが終了する

d．その打者が打席を完了する前にその投手が降板する

3　「申告敬遠」

守備側チームから球審に対し打者に“申告敬遠”を選択することの通知は、打者がバッタースボックスに入る前でもバッタースボックスに入っているときでも構わない。

選手は、試合中に１回のみ、申告敬遠を与えられることができる。

注１：その通知は守備側チームの監督からなされなければならない。監督は“タイム”　をかけ、タイムが認められたのちに打者に四球を与える旨を球審に伝えなければならない。

注２：ボールデッドとなり、塁上の走者は打者走者の四球により押し出される場合を除き進塁できない。監督が申告敬遠を通知したときの打者が申告敬遠を完了するのに必要なカウントに基づき、投球数が与えられる。

Ⅹ　スピードアップ

１　投手はボールを受けたら速やかに投手板に付いて捕手のサインを受ける。
２　捕手は受けたボールを速やかに投手に返球して、投手にサインを送る。
３　捕手はホームプレートより前に出ないで野手に声をかける。
４　内野手はボール回しを定位置で行う。
５　内野手は外野手からのボールを定位置から投手に送球する。
６　打者は打者席を外さずにベンチのサインを見る。
７　ベンチからのサインは短くする。
８　守備につくとき、ベンチに戻るときは必ず走ること。
９　審判員はスピーディーな試合を常に心がける。

Ⅺ　補則

１　ベンチ内のプレーについて
　１）常設の正規の球場は競技規則のとおりである。
　２）仮設のベンチは危険性があるのでボールデッドとする。
２　選手からのハーフスイングのリクエストを受ける。
３　全野手がファウルラインを越えたときにアピール権は消滅する。
４　飛球をデッドライン、ホームランライン内で完全捕球したと審判員が認めた場合、選手が捕球後場外に出てもアウトである。なお、野手がボールデッド地域に倒れ込んだ場合は、ボールデッドとなり、走者に１個の進塁を認める。野手がボールデッド地域に踏み込んでも倒れなかった場合はボールインプレーとなる。
５　ネクストバッタースボックスは作らない。次打者はベンチの出入り口付近に待機すること。
６　監督、コーチがグラウンドに入るときはコートを脱ぐこと。
７　ホームランを打った選手をたたえるときは、派手にしないこと。
８　選手はユニホームをきちんと着用すること。
９　メガホン等による指示、鳴り物の応援は禁止する。
１０　コーチスボックスの選手のコールドスプレー持参を禁止する。
１１　試合時は給水等必要に応じて補助要員がベンチ及びその近辺への立ち寄りを認める。
１２　打者はバッタースボックスに入ったのちは、その打席が終了するまで少なくとも片足はバッタースボックス内にとどめておかなければならない。（例外：トーナメント競技規則 3.試合規定参照）
　ペナルティー：打者が例外状態にない場合にバッタースボックスを出た場合、審判員は打者に警告を与える。警告後に再度バッタースボックスを出た場合、審判員はストライクをコールする。１人の打者に何度でもこのコールはなされる。投球数にはカウントしない。ボールデッドとなるが、走者は進塁しない。
　注：ストライクのコールが３ストライク目でない限り、打者はバッタースボックスに戻り新しいカウントから打撃を継続する。

以上